

## 第 91 回麻布獣医学会 一般学術演題 7

## 下顎に発生した高分化型メラノーマに対し 下顎骨背側 2/3 切除を行った犬の 1 例

○江口 徳洋<sup>1,2</sup>, 大石 太郎<sup>3</sup>, 田村 和也<sup>4</sup>, 藤岡 透<sup>4</sup>, 奥田 綾子<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>Vettec Dentistry, <sup>2</sup>麻布大学 解剖学第一研究室, <sup>3</sup>やさか動物病院,  
<sup>4</sup>倉敷動物医療センター アイビー動物クリニック

### 【背景】

元来、口腔内のメラノーマは悪性度が高く広範囲な拡大切除が必要とされてきた。悪性メラノーマと組織的に診断され顎骨切除した症例の中でも、遠隔転移により死亡する症例が多く見られるが、その一方で長期生存する症例を臨床的に経験してきた。その状況下で 2008 年 Esplin の報告で、組織学的に高分化型のメラノサイト腫瘍の存在が示唆され、罹患症例の多くで良好な予後が得られることが分かってきた。しかし臨床的に顎切除後の生活の質を左右する顎骨切除の範囲や程度について未だ検討された報告がない。

### 【目的】

高分化型と診断されたメラノーマに対し従来の広範囲な拡大切除ではなく、サージカルマージンを少なくした切除方法による再発の有無を検討する。また従来の広範囲な顎骨切除と今回行った手術の術式による術後における動物の生活の質の維持程度と差について比較検討する。

### 【方法】

症例はミニチュア・ダックスフンド、11 歳、5.5 kg、避妊雌。症例は左下顎腫瘍を主訴に主治医を受診する。初診から 2 週後に他院で麻酔下での組織生検を行い、病理組織検査結果は悪性メラノーマで、悪性度は高くなく高分化型を疑うとのことだった。そこで顎切

除を目的に紹介され来院した。左下顎腫瘍は左下顎の第 4 前臼歯から 1 後臼歯の舌側歯肉から起始し、吻尾方向に幅が広い有茎状として発生していた。左下顎腫瘍の切除方法に関し飼い主と相談したところ、サージカルマージンは 1 cm として下顎骨背側 2/3 切除と患側下顎リンパ節の切除を行うことになった。

### 【結果】

病理組織検査結果は黒色腫であるが、組織学的に悪性度は乏しく高分化型メラノサイト腫瘍も疑えるとのことで、マージンはクリアであった。下顎リンパ節は反応性過形成で、本症例の腫瘍は T2N0M0 のステージ 2 であった。術後翌日より元気、食欲はあり顎切除に伴う合併症、特に舌の変位と下垂、それに伴う捕食困難、下顎の変位やそれに伴う不正咬合は一切認められなかった。現在術後 8 カ月が経過しているが、再発、転移もなく経過良好である。

### 【考察】

口腔内黒色腫が全て悪性の挙動をとるとは限らない旨の、病理組織検査を元にした報告がなされた以上、高分化型の黒色腫におけるマージン設定の基準を再考する必要があると思われる。今回良性腫瘍を切除する際に多く使用する下顎骨背側 2/3 切除を行ったが、生活の質は術前と全く変わることなく、マージンクリアなので良好な予後が期待できるものと思われる。